

令和元年5月16日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03459

研究課題名(和文) 政治的オポジションのアリーナ分節による統合的把握

研究課題名(英文) Explaining different Political Oppositions by structuring arenas

研究代表者

吉田 徹 (YOSHIDA, Toru)

北海道大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：60431300

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：先進国の政党制や党派性が流動化し、新しい形の社会運動が生起する中で、政治的オポジションの姿は多様化をみせている。

本研究は、いわゆる「ポピュリズム」と呼称される政治現象や政治的形態を中心に、その供給側(政治家・政党)ならびに需要側(有権者・活動家)の相互作用を念頭に置き、研究対象国における新たな政治的オポジションの形式やその因果関係について主として分析を進めた。

その結果、こうした現象は、過去約30年間に渡る有権者市場の脱編成や組織的統合の弛緩の結果として表象しているものであり、現在進行している政党制の流動化の主要因であることを概ね突き止めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

政党制の変容、有権者の再編成、伝統的組織の形骸化など、先進国の多くは、これまでの政治学的分析の対象となってきた基礎的・理論的土台の変容を大きく見せている。

本研究は、民主政治の理念的な前提となってきたこれらの要素が、とりわけ新たな政治的オポジションの台頭を通じて、再検討を迫られていることを示すことができた。このことは、これまでの政治学上の伝統的なコンセプトや概念の応用が難しくなっていることを指し示しており、日本を含む、民主主義国の政治システムについての知見をアップデートの必要性を示唆している。

研究成果の概要(英文)： The de-alignment of electorates and the emergence of new forms of political contestation has been one of the major transformation in recent decades where political oppositions was active.

The study has been conducted on populist/populism phenomenon and actors observed in countries where the analysis has been made, focusing primary on the interactions made by the supply side (ie. Politicians and political parties) and the demand side (ie. Electorates and activists).

Part of the conclusion was that these new architectures is the consequence of the de-alignment and the fragmentation of electoral market since the 1980s that read to the disintegration of traditional organization involved in politics causing major transformation of the ongoing realignment of the party system.

研究分野：政治学

キーワード：政党制 オポジション 社会運動 ポピュリズム

1. 研究開始当初の背景

先進デモクラシー国における政治的オポジションの研究は 1960 年代以降に大きな進展を見たものの、その後、政治体制の安定を経て、低調なものとなっていった。他方で、民主政治におけるオポジションは、野党に代わって、いわゆる「新しい社会運動」のように質的な変化をみせることとなった。日本でも 1990 年代に政党システムが変容し、2000 年代以降に本格的な政権交代が生じる一方で、多様なデモや抗議運動が一般化していったように、院内・院外の双方で政治的オポジションのあり方は大きく変化してきている。

研究代表者は以上を問題意識として、段階的に野党についての通時的な研究を進めてきた。その一環として日本政治学会（2010 年度）で分科会「野党改革の比較政治」（C2）を企画し、組織改革という観点から野党の多国間比較を試みた。その後、新たな変数と事例を加え、内外の研究者の参加を得た上で研究を進展させ、『野党とは何か——組織改革と政権交代の比較政治』（ミネルヴァ書房、2015 年刊）を編み、野党の組織改革や動員戦略の変化について考察を深めてきた。もっとも、こうした予備的作業の中で多くの事例を集めることができた一方、民主政治における政党以外のオポジションの一般機能とそのモデル化、また、期待される機能について、より一層精緻なメカニズムの解明を行う必要性が生じることになった。そこで、分析対象の射程を広げて、政治的オポジションの果たす機能とその規範的含意を明らかにしようとしたのが本研究である。

2. 研究の目的

本研究は、民主政治における政治的オポジションが実際に果たしており、また果たすべき機能が何であるのかを明らかにするものである。政治的オポジションはこれまで政党組織（院内）と社会運動（院外）の領域で個別に研究されてきており、これが「野党」といった政党と「社会運動」といった抗議運動を含めて、「オポジション」と包括的に理解することの妨げとなってきた。

これに対し本研究では、政党組織と社会運動を、民主政治における統一的な主体として把握することを目標として、日仏英における「オポジション」の実態と機能を、とりわけ、それらが協調・対立・競争するアリーナの特定と解明を通じて明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、政治的オポジションの機能をアリーナ毎に分節化した上で、その共通項を抽出し、その包括的な理解に至ることを目指すものである。このため、主として政治的オポジションの公刊資料をもとに、政治的オポジションを 1. アリーナⅠ（組織間関係）、2. アリーナⅡ（競争）、3. アリーナⅢ（議会）の場面に分けて特定、体制順応性と政策適応性の 2 つを尺度に、各国の政治的オポジションの共通項と差異性を抽出して、その規範的な意味合いを導き出すことを目的とした。これは、前述のように、政党組織と多次元に亘る社会運動・異議申し立て運動の分節化と連関を可視化し、その機能上のパターン形成ならびに変化を把握するためである。

かかる目標を達成するため、3 年度に亘り内外の資料収集を主として行い、それらを分析・検討した結果、提出されるモデルの討議のために内外の研究者の協力を得つつ、国内および海外での研究会・ワークショップを企画・開催、また複数の学会での研究報告に対するフィードバックを得た。

4. 研究成果

先進国の政党制や党派性が流動化し、新しい形の社会運動が生起する中で、政治的オポジションの姿は多様化をみせている。

本研究は、いわゆる「ポピュリズム」と呼称される政治現象や政治的形態を中心に、その供給側（政治家・政党）ならびに需要側（有権者・活動家）の相互作用を念頭に置き、研究対象国における新たな政治的オポジションの形式やその因果関係について主として分析を進めた。この過程では、政党制のアリーナ、有権者市場のアリーナ、そしてその結果として生じた政治的・政策上の変化のアリーナが特定された。

その結果、こうした現象は、過去約 30 年間に渡る有権者市場の脱編成や組織的統合の弛緩の結果として表象しているものであり、現在進行している政党制の流動化の主要因であることを概ね突き止めることができた。もっとも、その政治的・政策上のアリーナでの変化については、明確な指標による変化を必ずしも特定できず、オポジションの多様化は、測定可能な政策変化を自動的に生み出すわけではないことも了解された。具体的には、フランスならびに EU 政治・欧州懐疑主義を題材に、複数の研究者による報告ならびに討議を行い、新たなオポジション空間の把握に努めるとともに、各国で生起する新たなデモ運動や政党組織との媒介過程、議会議

治・政党間競争との競合・対立・協調パターンを検討・分析した。そこでは、有権者市場の断片化と脱編成によって、政党—社会運動の基礎的關係が崩壊し、その結果として、それまで伝統的なオポジションが果たしてきた機能そのものが変容し、アリーナの比重や相互關係がこれまでとは異なった形で展開することが判明した。

政党制の変容、有権者の再編成、伝統的組織の形骸化など、先進国の多くは、これまでの政治学的分析の対象となってきた基礎的・理論的土台の変容を大きく見せている。

本研究は、民主政治の理念的な前提となってきたこれらの要素が、とりわけ新たな政治的オポジションの台頭を通じて、再検討を迫られていることを示すことができた。このことは、これまでの政治学上の伝統的なコンセプトや概念の応用が難しくなっていることを指し示しており、日本を含む、先進民主主義国の政治システムについての知見の再検討を要することを示唆している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 5 件）

1. YOSHIDA, Toru, “Populism “made in Japan”: A new species?” in *Asian Journal of Comparative Politics*, Article first published online: April 29, 2019 査読有
<https://doi.org/10.1177/2057891119844608>
2. 吉田徹 「フランス大統領選とナショナル・ポピュリズム」『憲法研究』第 2 号、2018 年、48-59 頁、査読無
3. 吉田徹 「「リベラル・デモクラシー」はなぜ動揺しているのか」『Research Bureau 論究』第 14 号、2017 年、48-56 頁、査読無
[http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_rchome.nsf/html/rchome/Shiryo/2017ron14.pdf/\\$File/2017ron14.pdf](http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_rchome.nsf/html/rchome/Shiryo/2017ron14.pdf/$File/2017ron14.pdf)
4. 吉田徹 「選挙と分極化の中のアメリカ政党」『レヴァイアサン』第 61 号、2017 年、172-175 頁、査読無
5. 吉田徹 「フランス国民戦線（FN）の変容 「極右」から「ポピュリズム」へ？」『国際問題』第 660 号、2017 年、25-35 頁、査読無
http://www2.jiia.or.jp/kokusaimondai_archive/2010/2017-04_004.pdf?noprint

〔学会発表〕（計 14 件）

1. YOSHIDA, Toru, “Retour Politique et économique sur l'ère Heisei: les années perdues du Japon?” L'Observatoire de l'Asie de l'Est (OAE) Conférences: Journée Japon à l'UQAM, 2019
2. 吉田徹 「ポピュリズムの概念史——その理論的課題」神奈川大学アジア研究センター共同研究グループ『アジアの政治発展』研究会、2019 年
3. 吉田徹 「民主主義の〈現在地〉」平成 30 年度第 56 回北海道高等学校教育研究大会（倫理・現代社会分科会）、2019 年
4. 吉田徹 「フランスの有権者はなぜ EU に背を向けるのか——欧州懐疑主義台頭の原因」日本 EU 学会第 39 回（2018 年度）研究大会全体セッション第 III 部「ポピュリズムとリージョナル・アクターとしての EU」、2018 年
5. YOSHIDA, Toru, “Populism “made in Japan”: a new species?” IPSA/AISP 25th World Congress of Political Science, GS12.23 Japanese Populism in a Comparative Context, 2018
6. 吉田徹 「2017 年フランス大統領選・下院選の変動はなぜ生じたのか」日本選挙学会 2018 年度総会・研究会分科会 F 比較部会 2 「変容する欧州：2017 年各国選挙の分析と展望」、2018 年
7. YOSHIDA, Toru, “La participation politique chez les jeunes au Japon, transformation ou retrait?” Conférence organisée par la Fondation France-Japon de l'EHESS, 2018
8. YOSHIDA, Toru, “Les consciences politiques des jeunes au Japon aujourd'hui,” Séminaire « Sciences sociales du Japon contemporain » organisée par l'Inalco, 2018
9. YOSHIDA, Toru, “Comprendre les populismes: perspectives européennes et japonaises,” Conférence organisée par la Fondation France-Japon de l'EHESS et la Fondation Maison des sciences de l'homme, 2018
10. 吉田徹 「ポピュリズム政治（史）の系譜」九州大学政治研究会 12 月例会、2017 年
11. 吉田徹 「フランスにおけるポピュリズムとその含意——〈アノマリー〉の連鎖と帰結」日本国際問題研究所 『『自由で開かれた国際秩序』の強靱性—米国、中国、欧州をめぐる情勢とインパクト』事業サブプロジェクト III 「混迷する欧州と国際秩序」研究会、2017 年
12. YOSHIDA, Toru, “Labour Market Inequalities and failing support for Democracy: How Strong is the link? Which factors explain inter-country differences?” Workshop of the German Institute for Japanese Studies, EHESS, 2017
13. 吉田徹 「EU はいかに信頼せれずに至ったか——2017 年フランス大統領選から」日本政治学会 2017 年度総会・研究大会 C-6 : EU 統合への「信頼性」の揺らぎ—ポピュリズムと欧州政治の動態（地域統合研究会）、2017 年

14. 吉田徹「欧州懐疑主義の系譜—欧州憲法条約否決から Brexit まで」日本防衛学会平成 28 年度（秋季）研究大会、2016 年

〔図書〕（計 4 件）

1. 吉田徹「＜民意＞とは何か」吉田徹【編】『民意のはかり方—「世論調査×民主主義」を考える』（法律文化社）、2018 年、1-22 頁（全 158 頁）
2. 吉田徹『「野党」論——何のためにあるのか』（筑摩書房）、2016 年、全 240 頁
3. 吉田徹「「大統領化」の中のフランス憲法改正」駒村圭吾・待鳥聡史【編著】『「憲法改正」の比較政治学』（弘文堂）、2016 年、176-199 頁
4. 吉田徹「ポピュリズムとは何か——「民の声は神の声 (Vox Populi, Vox Dei)」？」杉田敦【編】『岩波講座現代第 4 巻グローバル化のなかの政治』（岩波書店）、2016 年、103-125 頁

〔その他〕

ホームページ等 <https://lex.juris.hokudai.ac.jp/~yoshidat/index.htm>

6. 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。